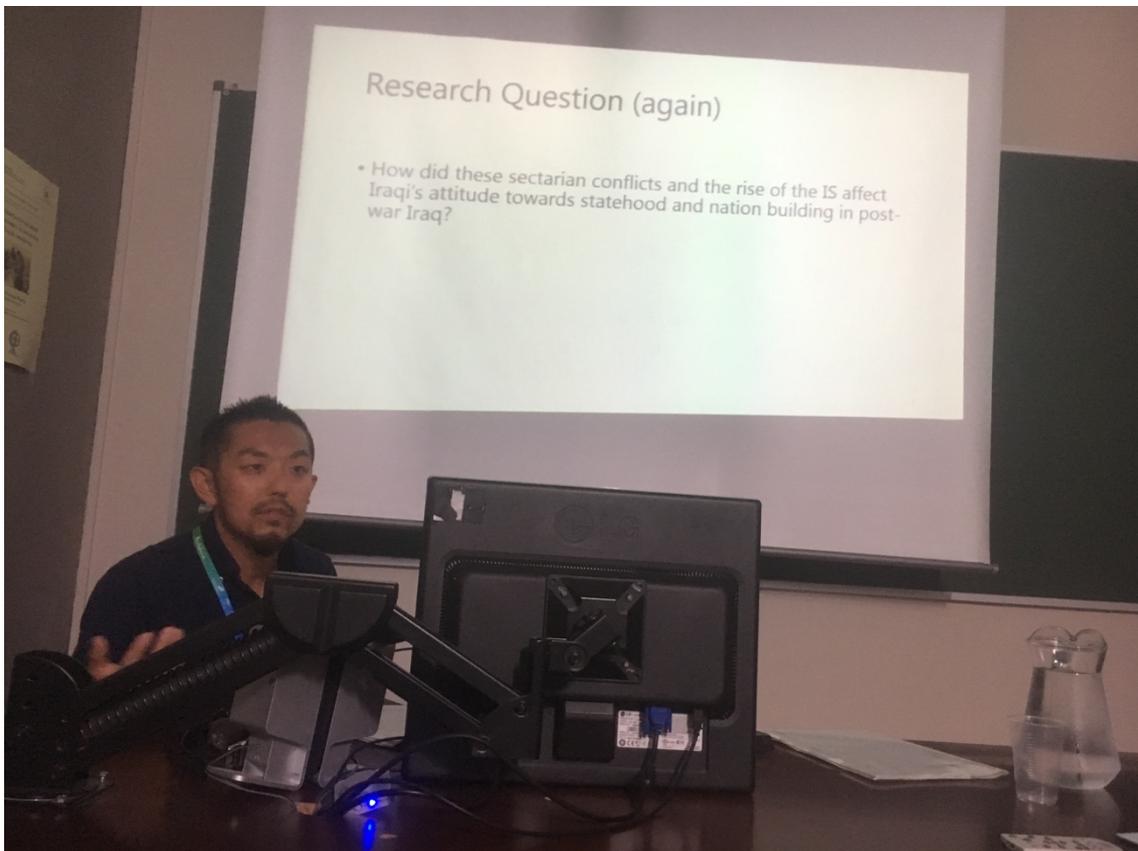


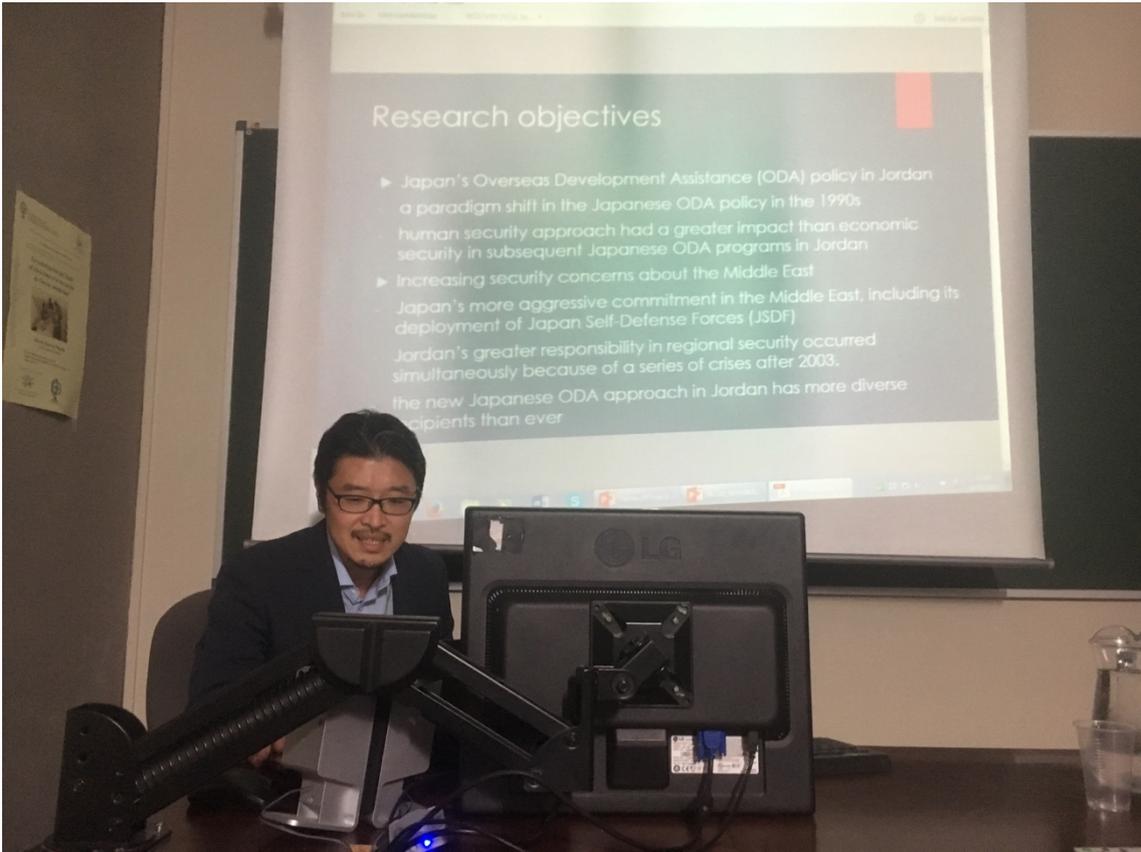
佐藤 麻理絵（立命館大学衣笠総合研究機構、日本学術振興会特別研究員(PD)）報告
Jordan's balancing act to the refugee crisis; redefining civil society

2018年7月16日から20日の日程で開催された WOCMES2018 にて、ヨルダン政治に関する発表を行った。本発表は、紛争と密接に関係している中東3カ国（シリア、ヨルダン、イラク）を取り上げて、それぞれの政治体制や、国際関係について論じるパネルの一つとして実施したものである。本報告では、ヨルダンの体制維持について、度重なる難民流入の経験蓄積を踏まえて、市民社会による対応の観点からそのメカニズムを明らかにした。ヨルダンは権威主義的君主制であり、中東地域で2011年から発生した民主化要求の運動を経ても体制が維持されていることから、その体制維持のメカニズムが注目されている。権威主義的体制を敷く国家の主な特質として、議会政治が実施されている場合でも政党が未熟であり、政治空間における敵対勢力としての政党という地位を確立できていない点が挙げられる。そのため、職能連合や市民社会組織の重要性が指摘され、市民が道路に繰り出して政治的要求を行った2011年の「アラブの春」も権威主義体制で特に確認されてきたものである。本報告では、市民の民主化要求が高まる中で、シリア難民の流入により経済的な逼迫や社会的にも圧力がかかる中でのヨルダンの舵取りを、慈善の分野（広くは社会保障）で活動を展開する市民および政府主導の組織の分析から明らかにした。

大会では午前と午後に分けて数多くのセッションが実施され、またラウンドテーブルやシンポジウムも同時に走る中で、関心のある分野のセッションやシンポジウムが重なることも多く、どのパネルに参加するかを常に吟味する必要があったように思う。内容は多岐に渡り、また参加者も世界中から集まっているために、それぞれの切り口や方法論、また議論展開の点では興味深いものが幾つもあった。難点としては、4人発表者のうち1人がフランス語で発表というパネルや、視覚的資料の一切ない発表が続くパネルでは、その後の議論に加わるのは難しいと感じた。ブックフェアでは、日本ではすぐに取り寄せることが出来ない大学出版の新刊などが並び、常に参加者が周りを囲んでいる様子で、充実していると感じた。

写真：





Research objectives

- ▶ Japan's Overseas Development Assistance (ODA) policy in Jordan
 - a paradigm shift in the Japanese ODA policy in the 1990s
 - human security approach had a greater impact than economic security in subsequent Japanese ODA programs in Jordan
- ▶ Increasing security concerns about the Middle East
 - Japan's more aggressive commitment in the Middle East, including its deployment of Japan Self-Defense Forces (JSDF)
 - Jordan's greater responsibility in regional security occurred simultaneously because of a series of crises after 2003.
 - the new Japanese ODA approach in Jordan has more diverse recipients than ever